
プリクラのススメ

真弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プリクラのススメ

【Nコード】

N3226R

【作者名】

真弥

【あらすじ】

プリクラ。男が一人でその戦場へ向かうには、多くの犠牲を伴う。俺は、そんな戦場に立ち向かうべく、多くの計画を実行していく。

・始まり・（前書き）

この小説はススメシリーズ第二章です。

第一章 立ち読みのススメ

第三章 脱獄のススメ

- 始まり -

俺は今、とてつもなくイライラしていた。友人達の会話に潜入することが出来なかったからだ。そもその始まりはスキンヘッドだ。

そう、それはおとといの話だ。

俺は金が無かったために、楽しみにしていた雑誌が買えなかったために、立ち読みという過酷な策を実行しようとしていたが、外見上恐ろしいスキンヘッドの店員がレジにいて、そのうえ俺が求めていた雑誌がレジの前に置いてあった。

俺はいろいろな計画を立て、雑誌を読もうと挑んでいったが、悉く失敗してしまい、最後の賭として、神風特攻隊の如く、堂々と尚かつ勇敢にスキンヘッドの目の前で、立ち読みをしたのだった。しかし彼は俺が雑誌を読み終わるまでの間、一言もしゃべることがなかったのだった。

そのため、逆にそれが怒られるのを覚悟で臨んだ俺にとって苦痛であったため、事もあるうか、俺はスキンヘッドに「怒れよ！」と怒鳴ってしまったのだった。

しかし、彼は怒るところか、涙を目に溜めて怒らなかったことを謝罪をしてきたのだった。

結果的に俺は、そんな状況下で雑誌を読んだため、ほとんどの内容を頭に詰め込むことが出来なかった。しかも皮肉なことに、友人達が話す話題は専らその雑誌の話であった。

気分が悪いまま自宅へ到着した俺は、家のインターホンを押した。「まだ帰ってきてないか……」

俺の父は土木会社を経営していたし、母は近くの薬局で働いていたため、家に帰ると両親が共に留守にしているということがよくあった。仕方なく俺は、家の外にある狸の置物をよけて、下に隠された鍵を取り、また狸を元に戻した、いつ見ても間抜けな顔だ。

鍵を開けて、家の内部に進入しようとしたときだった、ふと郵便ポストに入れてある手紙に気が付いた。

「ま……まさか！」

その手紙を取り出して、俺は慌てて手紙の差出人を確認した。

「よしやあつっ！」

俺はガッツポーズをし、手紙の訪れを歓迎した。そしてすぐさま家の中へ飛び込むと、階段を駆け上がり、自分の部屋のベッドにダイビングして、手紙の封ををゆつくりと開くと、笑顔で手紙を読み始めた。俺はいつの間にか、さっきまでイライラしていたことも忘れ、たった一枚の手紙の虜となっていた。

お久しぶりです。元気ですか？

私の住む街は今、お祭りがあつてにぎやかです。

昨日も、一番の親友と一緒にお祭りに行きました。

私にはお兄ちゃんがいるんですが、昨日はお兄ちゃんとお兄ちゃんの友達が、御神輿を担いで、

街中を歩き回っていました。

私は祭りが大好きです。

とっても楽しくていい気分になれるからです。

その時にプリクラ撮ったので送ります。

もしよろしければ貴方も送って下さいね。

手紙の内容はこうだった。その手紙に貼られていたプリクラには、浴衣を着た美少女とリーゼント頭で黒いサングラスをかけた男が写っていた。多分その美少女が、手紙の差出人である。

多分という曖昧な言葉を使った理由なのだが、俺はその手紙を差し出した女性にあったことが無いからである。

では何故、手紙が来るのだろうかという、それにも波瀾万丈な理由があるのだ。

思い起こせば数力月前。俺は友人Cの家で一緒にごろごろと寝そ

べりながら、雑誌を読んでいた時のことであつた。

「おい、これ見るよ」

友人Cが、ギターの譜面などが載せられた月刊誌を俺に見せた。

「それが何？」

いいから見るよ。そう友人Cが言い、最初から十ページくらいのところを見せてきた。

「みんなの楽しい広場？」

そう、友人Cが開いたページには、そう書かれていて、その見開きのページには。読者のいろいろな意見や要望、それに文通希望の人たちの言葉が載っていた。

「ここに文通希望者としてはがきを送れば、一人くらい女友達が出るかもよ」

友人Cはニヤニヤと俺の顔を見ながらそう言った。俺は友人Cのその態度に嫌気がさし、次の瞬間「大馬鹿野郎！俺には女なんて必要ないんだ！俺をそこら辺の若僧と一緒にするんじゃない！」と怒鳴つたのだつた。

一ヶ月後、友人Cの予想以上に、多くの女性から手紙が届いた。

俺は点へ舞い上がるほどの歡喜に包まれた。

手紙は合計で五通届き、そのうち三通が女性で、残った二通が野郎からであつた。俺は文章を読むのが苦手であつたが、なんて事はない、紙を三枚読むだけのことだ（野郎の手紙は読む前にまつふたつに切り刻み、ゴミ箱へ捨てたから）俺は、早速一枚目の手紙の封を切つた。

はじめまして。私は今年の十月で三十九歳になる専業主婦です。

貴方様の言葉を読んで感動し、筆をとりました。

私には十八歳の息子と一歳年上の主人がいます。

息子は学校で教師に暴力をふるい高校を退学になり、主人は酒と暴力に明け暮れる毎日を送っています。

私は貴方様との文通を希望します。
貴方様なら、私のすさみ傷ついた心を癒してくれると思います。
お返事待ってます。

俺は少し焦った。

確かに俺は、文通相手を求めたのだが、別に不倫の相手になることを望んでいるわけではないからだ。

俺は、雑誌に応募したはがきに、人妻を誘惑するような言葉を書いたかどうか思い出した。

特に思い浮かぶ点はないが。差詰め『僕の守備範囲は、大人っぽい魅力を持った小学六年生から、日常生活に嫌気がさした麗しきマダムです』と、いうところだろうか？（それにしても、そんな言葉で感動するだろうか？）

俺はその手紙を横に置いておき、二通目の手紙を読み始めた。

この手紙は、不幸の手紙です。この手紙を一週間以内に、五人の人に送らなければ……。

二通目の手紙を抹殺したあと、俺は三通目の手紙をドキドキしながら開いた。何故かその手紙は、オーラのようなモノを発し、なんだか俺に幸せを運んでくるような手紙であった。

初めまして。私は中学一年生の女の子です。

貴方のユーモアな文章が好きになりました。

もしよければ、私のペンフレンドになって下さい。

それが彼女との出会いだった。

彼女からの手紙は、今日で三通目ではあるが、プリクラが貼つてあるのは、今回が初めてである。

俺はいつも彼女の顔を想像しながら文通を続けていたが、まさか

こんなにも美しい女性だとは予想していなかった。（白く透き通る肌に大きな瞳、長いストレートの髪に輝く笑顔！ 俺のタイプじゃあゝりませんか）

自分の顔に自信はまったくなかったが、よく友達に「お前は木村拓哉と雨上り決死隊の蛍原をたして2で割ったような顔」と言われるので、彼女も俺を見たらかつこいいと思うだろう（何てったってキムタクだぞ！ キムタク！）

だが一つ問題がある……。今手元に、自分の存在を証明するプリクラが無い。

俺は止むを得なく友人に助けを求めることにした。

「もしもし。俺だけど、今暇人？」

俺は友人Dに電話をした。

「ああ、何で？」

友人Dは、無愛想に応えた。彼はいつもクールな奴で、顔の形や出っ歯が、芸人の明石家さんまに似ているため、同じクラスの仲間から、よく冷凍さんまと呼ばれている奴だ。しかし、彼の前では、その通り名は禁句であって、皆、彼のことをこっそりそう呼んでいた。

「あのさあ、俺もお前も、いずれ大人になっていくじゃん」

だから？ と、友人Dが言ったが、俺はそんな態度を気にせずに話を続けた。

「それで思ってたんだ。今という時を大切にしなくちゃって。それでね、提案があるんだよ、すごく良い案なんだ」

へえ。と、彼は興味なさそうに相槌を打った。

「俺達の若い姿を、この世に残さないですか？」

「はっ？」

友人Dは、どうやら混乱しているようだ。

「つまり、簡潔に言えば、プリクラを撮ろうと言っわけだ」

「誰が？」

「俺とお前」

「どうして？」

「一人で撮るの恥ずかしいじゃんか、だからです」

何だお前！ その言葉と同時に彼はキレた。

「何で俺がお前となんか好きこのんでプリクラなんか撮んなきゃいけないんだよ！」

「ちよつと待て、落ち着けよ！」

俺は必死で彼の怒りを鎮めようとしたが、彼はもう再生不可能になっっていた。

「ふざけんなよ！ 何かムカツク！ 本当に何かムカツんだよお前！」

「落ち着けよ！ そこまでムキになって怒ること無いだろ！ そんなに怒りすぎたら、冷凍さんまが解凍さんまになっちまうぞ……はっ！」

俺はそこまで言い切ったあと、自分の話術に後悔した。友人Dは「死ね！」と、怒鳴ったあと、ガチャリツと電話を切ってしまった。

「ごめんね」。あの子まだ塾から帰ってきてないの」

そう言つて、友人Zの母は電話を切った。どうも今日はみんな忙しいらしい。

友人Aは友人Bと釣りに行っていたし、友人Eは彼女とデート、友人FとJは音信不通で（中略）友人Yは祖父とボーリングへ言っていた。

俺はその時思った。こういう大切なときにいない友達、真の友達とは呼べないのだと。所詮友達というのは、お互いに話しが出来るとか、相手のことを少し知っているだとか、その程度であつて、真のとは呼べないのである。

結局、ただの友達とは、どうあがこうと、家畜当然の付き合いであるのだ（使ったり、使われたり）真の友達になるためには、お互いがお互いの意見を聞き合い、分かち合い、相手の性格を知ることが必要なのだ。

ただそんなことどうだっていい。問題点というか、現実の事なのだ。そんなことどうでもいい。今はプリクラを撮ることが先決だ。「しょうがない、恥ずかしいが、一人で撮るか」

こうして、俺の長きに亘るプリクラとの戦いが始まるのだった。

計画その1 女装する

一人で撮ると言っても、やはりそれは恥ずかしいし、俺のプライドが許すはずがない。

「女だったら一人での変じゃないかな？」

俺はそう考えた。

まず服を揃えた。姉や妹がいれば、すぐに女用の服が集まっただろうが、一人っ子なのでそうはいかない。仕方なく俺は、母の洋服ダンスを搜索することにした。

母の洋服ダンスを開けたとたん、一番最初に目に入っただのは、赤いチャイナドレスだった。腿が見えるほどに縦に開いた切れ目が、多くの男を虜にする効果を持つ衣装であるが、三十代後半の母が、この衣装を着ているのだろうかと思えるだけで嘔吐しそうになる。

十分くらい、自分に似合いそうな服を探しただろうか、さすがにお洒落な母だけのことはある、洋服ダンスに所狭しと並んでいる有名ブランドの服やバック、そして、それらに隠れるように存在するへそくり、へそくり、へそくり。

こんな所に隠していたのか。俺や父が嘆くのも無理はない。せっかく父が汗水垂らして貯めてきたお金を、母は無言で、有名ブランドの服へと変貌させていくのだろう。よく父が母に言っていた。

「お前に服を買うなどとは言わない、でも一つだけ文句を言わせてくれ……。お前が俺達の金をやりくりするのはいい、ただ俺の小遣いが月四千円ってのは少ないだろ！ 最近は高校生でも月一万は貰うぞ」

俺は、白いブラウスに黒色のミニスカート（これもいつ着るのだろうと疑問に思ったのだが……）を借りて、自分の部屋で着替えた。髪の毛も、左右の耳の後ろ辺りを縛った。

俺の部屋には大きな鏡があり、俺は恐る恐るその前に立ってみた。

「かつ……、可愛い！」

俺は自分の可愛さに驚いた。さすがにキムタク似なだけはある、かなり美形だ。これなら女性として見られるだろう。しかも俺は声のトーンが高い。去年クラスの一発芸大会をやったときもののけ姫を熱唱し、一躍クラスのヒーローになったほどだ。

「よし！ 行くわよ！」

俺はプリクラが置いてあるデパートへ向かった。

デパート内にあるゲームセンターは、毎日のように若者が集まる場所でもあった。今日も多くの人がゲームセンターに集まっている。エレベーターで、五階までやってくると、ゲームセンター独特の音が耳に届いてきた。エレベーター付近のベンチでは、そこに座る女性二人を、野郎二人組がナンパをしていた。

「ナンパ……されちゃうかも」

ちよつと俺はドキドキしてきた。プリクラを撮るときに着替えようと思っていた服が入っているバックを強く抱きしめて、その気持ちを、無理矢理抑えた。

「ねえ、ちよつと君。俺達とデートしない？」

俺の予想は的中した。でも焦る必要はない。俺は今、正真正銘女だからだ。

「ちよつとだけならいいだろ、なっ？」

「そうだよ、楽しもうぜ」

そんな男達の言葉で、今まで男達に背を向けていた俺は、後ろを向いた。

「ゲッ！」

俺と男達（二人だと判明）がそう言ったのは、ほぼ同時であった。俺に声をかけてきた二人は、去年バスケット部を引退した先輩であった（俺は今、バスケット部に所属している）

「お、お前……」

「あっ、お兄ちゃんの前輩ですよ？」

先輩達に何か言われる前に行った。二人の先輩は、お互いに顔を

見合わせて、また驚いた顔で俺の方を見た。

「あいつの……妹か？」

一人の先輩が聞いてきた。

「はい！」

さわやかな笑顔で俺は応えた。

「……でも」

そう先輩がまた何か言おうとしたので、俺は慌てて時計を見る振りをした。

「あつ！ もうこんな時間！ すみません、今日私家で夕食を作る
ことになってるんです！ 早く帰らないと、部活が終わって、疲
れて帰ってくるお兄ちゃんに怒られるので……ではさようなら」

そう言って、俺は走り出した。改めて今回のミッションの難しさを思い知った。

計画その2 子供と撮る

デパートの外部には公園がある。デパーに買い物をしに来る親子のために設立されたもので、親が買い物をしている間、子供はそこで遊べるようになっていた。

麦わら帽子をかぶった一人の少年が、蝉を追って公園を走っていた。少年に追われていた蝉は、大急ぎで羽を羽ばたかせて、一本の木にとまった。少年は木に近づくと、ゆっくりゆっくりと木の根本へ歩み寄り、そしてサツと持っていた網で、木に掴まっていた蝉を捕まえた。

俺はそんな無邪気な少年を見て、心を揺るがせた。俺にもそんな時代があったのだと改めて実感した。でも今日はそんな甘い考えではないけない。

その子がターゲットだ。

俺は黒いサングラスをかけて少年に近づいていった。少年は自分の危機が迫っていることも知らず、捕った蝉を夢中で虫籠の中に入れていた。

「蝉捕えるのうまいね」

俺が少年にそう呟いた瞬間、少年はビクツと体を震わせた。青ざめた顔で俺を見た少年は唇を痙攣させ、妖怪を見るかのような目つきで、俺のことを睨んだ。

「ちょっと見せてよ、その蝉」

俺は少年に手を伸ばした。少年は俺のサングラスに隠れた瞳が、悪の色に染まっていることを悟ったのか、無言で俺に虫籠を渡そうとした。

「！」

少年は目を見開いて、恐怖で怯えている様子であった。それもそのはずである、俺は虫籠を掴むことをやめ、少年の腕を握りしめたからである。

次の瞬間、俺はポケットから、小さなナイフを取り出した（しかしそのナイフは、祭りで買った、刃が柄に引っ込む玩具）そして、少年に見せた。

「何も言わずについて来い！ いいか、今からお前は俺の弟だ。もしそれが出来ないようだったら……わかるよな？」

そう言つて、俺は少年にわざとらしくナイフを見せつけた。少年は一度息を飲み込むと、黙って静かに頷いた。

俺と弟は、仲良く（偽り）手を繋ぎ、仲良く（偽り）ゲームセンターにやってきた。蟬の入った虫籠は、邪魔になるからといって、弟から受け取り（偽り、訂正・奪うと）公園のベンチの下に置いてきた。そのことが気になるのか、弟は心配そうに周りを気にしていた。

「プリクラ撮ろうか」

俺の一言に、弟は素直に（偽り、訂正・一瞬躊躇ったが、俺のナイフを見てしぶしぶ）頷いた。

肌をこんがりと焦がしたアボリジニー風の女二人の写真が印刷されたプリクラを選び、その内部へと潜入した。そのあと俺は、弟の身だしなみに気を配った。

「お前、帽子とれよ」

俺は何となくそれが気になった。弟は（多分）お気に入りの麦わら帽子を取られるのが嫌だったのか、首を横に振った。でも俺の「取らなきゃ殺るよ」という優しい言葉で弟は納得した。

「えっ！」

少年が帽子を取ったとき、俺は嫌な予感がした。この少年、どこかで見ただことがある。俺の頭の中で、記憶が渦を巻いて激しい螺旋を形成し、走馬燈のように記憶がどんどん蘇っていった。そして、おとといの華麗なる戦いのワンシーンが思い出された。

戦闘の第三幕のときである。俺は雑誌を買ってきた少年を拉致し、雑誌を読もうとしたときだった、それを遮るかのように、少年の父であるやーさんが現れた

そう、その時の少年と弟は同一人物なのだ。

「なあ……お前もしかして」

俺がそう言つと、少年は、小さく頷いた。
最悪だ。

まさかおとといと同じ少年を拉致つてしまうなんて！ 普通の少年ならそれでもいい、最もその方が、俺の怖さを知っているのだから、何でも言うことを聞くのであろう。しかしこの少年はまずい。バックには、何とか組とかに入っていそうな親父がいるのがわかつているのだから！

「なあ……ひよつとして、今日も……？」

お父さん来ているのか？ そう続けて聞こうとしたが、少年が返事をする前に、その難問は解けてしまった。質問の答えは……イエスだ。

「われ！ わしの倅に何しとんじゃ！」

聞き覚えのあるドスの効いた声が、耳に届いた。プリクラのカーテンを開き、少年の親父であるやーさんが現れた。

「いや、その……」

俺は目に見えて怯えていたと思う。先日この状況に陥ったが、雑誌に炭疽菌が挟まっていたから、という何とも不思議な嘘をついて、やーさんを騙すことで、その場を回避できた。

だが、もし仮に、少年が昨日あった事実をこのやーさんに言ってしまったのなら、俺の人生は、きつとここで終わってしまう。俺は神に身の安全を守ってもらいたかった。

しかし、自分の首を自分で絞めるような行動をしてしまった。額に流れた冷や汗を腕で拭おうとしたとき、サングラスが引っ掛かり、顔から外れ、下に落ちてしまった。

「お、お前！」

一瞬にして、やーさんの目の色が変わった。
終わりだ！

俺が心の中で死を覚悟した刹那、驚くべき出来事が起こった。や

「さんが俺をその厚い胸の中へ抱え込んだのだった。俺は優しさと汗臭さが充満する抱擁の中で、何がなんだかわからなく、逆に恐ろしくなっていた。」

「あれ……」

俺が必死に彼の牢屋から逃げ出そうとしていると、俺の肩を握り、嬉しそうに俺を見つめた。鼻息が荒く、俺は彼から出る排気ガスを避けることで精一杯だった。

「この前はありがとな！ 研究上手くいっているか？」

しめた！ こいつはまったくわかっていない！ どうやら少年は、俺がやったことを、この馬鹿に説明してないらしい。

俺は命拾いをしたその瞬間、緊張の糸がプツリと音を立てながら切れるのがわかった。こうなれば、あとは俺の世界だ。

「あなた方のお陰で、いい研究が出来ましたよ。本当に心からお礼を言いたいです。今何しているのか疑問に思いましたね？ これはですね、その研究を手伝ってくれたこの子の写真を撮って、毎週うちの研究室が編集している『研究のススメ』という新聞に載せようと思っていたんです。ですが、あの時は急いでいたので、写真を撮ることが出来ず、その上、住所を聞くことも出来なかったので、後悔していたんです。しかし、たまたま公園を通り過ぎようと思ったときに、この子がいたのに気が付きまして、本当はカメラで撮りたかったんですが、あいにくカメラを持っていなかったんで、一緒にプリクラを撮ろうってことになったんですよ」

そうか、そうか。そう言ってやーさんは笑顔で少年の頭を撫でた。「……わしも写ってよいか？」

は？ 俺は思わず顔を顰めた。あんたずうずうしいな！ 確かにあんたはこの少年の保護者だけど、あんたみたいなやばそうな面、写したくないよ！ そんなことも言えず、俺はやーさんをカーテンの中へ招いた。どうやって撮るんだ？ カメラはどこだ？ シールになつたらどこから出て来るんだ？ などと、やーさんは終始質問してくるので、俺は嫌々全ての問いに答えていった。

機械が『カシャッ』という子供騙し的な効果音を発音し、三人の停止した姿が、画面上に写し出された。こんな歳で初体験を経験したやーさんは、満面の笑みでピースをしている。かたや俺と少年は、別々の私情で顔を暗く曇らせていた。

「今日は楽しかったぞ。この紙に住所書いたといたから、新聞が出来たら持って来んしゃい」

そう言つて、やーさんと少年は、親子仲良く（少年はいまだに怯えているが）ゲームセンターから出て行った。俺は彼らの後姿を見ながら、途方にくれていた。

「……どうしようか」

計画その3 女性と撮る

今更、野郎一人でプリクラを撮る馬鹿なんていない。それどころか、多くのゲームセンターでは（俺が行くゲームセンターはそうではなかったが……）男性のみでプリクラを撮ることを禁止しているほどだ。

しかし、女性二人なんかでプリクラを撮る者は、いくらでもいる。俺はそこに目をつけた。

「ねえ。俺と一緒にプリクラ撮らない？」

半ばナンパ風に、ベンチに座っていた二人組みの女性に声をかけた。一人の女性は、今時のギャル風で、服をだらしなく着こなし、髪を茶色に染めていた。顔は童顔で、黒のミニスカートと白いパーカーが良く似合っており、その黒いブーツで踏みたいというマゾ的要素が自分の中で膨らんでくるほど美しい容貌だった。

そしてもう一人は、その女性と対称的で、黒髪の手短ヘア。白いワンピースを着こなし、黒いロングスカートを穿いていた。いかにも真面目そうなお嬢様という感じで、もう一人のギャルとどのような関係なのか興味があつた。

「あんた誰？」

ギャルが俺を見るなりそう言った。

「俺、木村宅哉って言うんだけど、君たちとプリクラ撮ってみたいって思ってたさ」

もちろん偽名だ。しかし俺はキムタクに似ていることで有名だから、ひよっとしたら俺を本物と思ってすんなりプリクラOKになるかもしれない。

「キムタク？」

そう言ってギャルが笑い出した。失敗か。

「キムタクって言うよりも雨上りの蛭○だよ」

ああそうだよ！ 俺はキムタク+蛭○だよ！ しかしなんとなく

掴みはOKのようだ。

「まあね。よく言われるよ。でさ〜一緒に撮らない？」 どうする？」 と言つて、ギヤルはお嬢様に話しかけた。お嬢様はなにやら小声でギヤルに言つと、またギヤルが俺に話しかけた。

「別にいいだつてさ」

よっしゃ！ これで作戦成功だ！ いろいろあつたけど、これでこの作戦は終わるんだ。

「でも一つ条件があるんだつて」

「え？」

なんか嫌な予感がする。俺は恐々と、ギヤルの言葉に耳を傾けた。「あのね、この子の兄さんがもうすぐここに来るんだつて。それでプリクラそのお兄さんにも写ってもらいたいらしんだよ。だから待つて。それでもいい？」

対したことはない。確かお嬢様のお兄さんが来ると言うのは予想外だが、別に何もやましいことはないし、プリクラを撮ればそれでサヨナラなんだから問題はない。

しかし五分後、俺の思いは大きく変化した。

お嬢様の兄さんが……いや、ブルースリーが現れたのだ。お嬢様の兄さんではあるが、ブルースリーなんだ。

彼は、ほぼお河童頭をしていて、黒い武道着を着ていた。顔も鬼気迫るものがあり……どれもこれもブルースリーそっくりなんだ！「お兄ちゃん……この人がプリクラ撮りたいんだつて、一緒にとつて言い？」

と、お嬢様がブルースリーに言った。ブルースリーは、まるで宿敵を見るかのように俺を睨むと、俺に近寄つてきた。

「アチヨオオオオ！」

そう言つて、ブルースリーは俺に手を出した。どうやら握手を求めているようだ。俺は一瞬にして彼に興味を持った。

俺が握手をすると、ブルースリーは嬉しそうに、鼻頭を親指で擦った。これもブルースリーの癖に似ている。俺は一瞬本物のブルースリーだと勘違いしてしまうほどだった。

「じゃあ撮りに行こうか」

そう言つて、ギャルとお嬢様はプリクラへ向かつていった。それを追うようにブルースリーが、敵を追い込むような軽やかなステップをしながら、時折「アチヨオオオ！」と叫びながら動き始めた。俺はほとんどブルースリーを見つめながら、三人についていった。

四人でプリクラに入ると、ギャルが率先して設定を決めていった。お嬢様はギャルの行動を見つめていた。

問題はブルースリーである。

「オアチャアアア！」

そう雄叫びをあげながら、一生懸命服を脱いでいるではないか！確かにブルースリーは上半身裸のイメージが強いが、別にやる必要ないじゃん！　ていうかプリクラに入るなり服脱ぐなよ！　おかしいよ！

「お兄ちゃん！」

それに気が付いたお嬢様が叫んだ。良かった、赤の他人の俺からは、そのブルースリーの行動を注意できないが、実の妹（それも疑わしいが）からならきつと言える。助かった。

「また鍛えたの？　筋肉増えてるじゃない！　まったく、無理しないですよ！」

そつちななの！？　問題はそこじゃないと思うよ！　どう考えたつて、裸でいることを問題にするべきだと思うが！

「まあお兄さん！」

次はギャルが驚くように言った。そうだ、実の妹は兄の裸に慣れていて、注意しないのかもしれない。しかし友人としては（友人なんだよな？）友達の兄貴が裸になっっているというのは信じがたい光景であろう。だからきつと注意してくれるはずだ！

「いつ見ても素敵な身体ね！」

いつも見てるの！？　なんで注意しないんだよ！普通に考えておかしいよな？　あれ、俺がおかしいのか？　よくわからなくなってきた。

「準備いい？　撮るよ」

ギャルが言った。俺は一つの疑問に辿り着いた。このブルースリーはどんなポーズでプリクラを撮るのだろうか？　ブルースリーの決めポーズはいろいろあるのだが（とは言っても、ブルースリーは数えるほどしか見たことがない）どのポーズで自分を写すのだろうか？　興味津々である。

『ワラッテ、ワラッテ』

プリクラが嬉しそうな声で俺たちを誘った。俺は必死にブルースリーを凝視した。まだブルースリーは架空の誰かと戦っていた。

『3　2　1』

プリクラがカウントダウンを始めた。ブルースリーは自分の流した汗に酔いしれながら、また鼻頭を親指で擦った。

『カシャ！』

とうとうこの瞬間が来た。これだけブルースリーの姿を映しているんだから、ブルースリーらしいポーズをとってくれるに違いない！
「チーズ！」

普通だ！　普通にピースしている！　期待を裏切られた。ブルースリーは可愛い笑顔でピースをしているじゃないか。何かこう変わったポーズをしていてくれるんだったら話は別だが、そんなんじゃ僕怒っちゃいますよ！

「ちよつと！」

ギャルの言葉で我に返った。

「あんだ、横向いちゃっているじゃん！」

そうだった。プリクラを撮るという目的を忘れていた。ブルースリーに夢中になるあまり、大切なことを忘れていた。

「ごめん」

俺は一言そう言った。ブルースリーは見ちゃいけないんだ。見ち

やいけない……。

「チーズ！」

見てしまった！ ブルースリーを見てしまった。俺は自分に言い聞かせたはずなのに、見てしまった。今度はピースをしていなかったものの、両手の人差し指だけ立て、それを両方の頬に指し、首を右斜め45度に傾けていた。今時、小学生でもやらない！ しかも可愛くない！

「ねえ、また横向いちゃってる！」

はっ！ やべえ！

「もういい！ らくがき始めちゃうよ！」

ギャルが半ばイライラしながら言い放った。お嬢様も冷ややかな目で俺を見ている。ブルースリーは、自分の姿に満足したのか、嬉しそうな顔をしながら、服を着始めた。

何か生気が吸い取られるような気持ちになった。プリクラを撮るという行為よりも、ブルースリーの行為に気を取られ、計画が台無しになってしまった。

「はい、あげる」

ギャルが嫌そうに俺にプリクラの欠けらをくれた。

プリクラを見ると、俺は目を輝かせながら、ブルースリーを見つめて不思議な顔をしている。ギャルとお嬢様は慣れた雰囲気ポーズを決めている。ブルースリーは顔に似合わないポーズが歪だった。

そんなことを考えていると、ブルースリーがまた俺に近づいてきた。ブルースリーは本当に嬉しそうな顔で、俺を見つめていた。

「アチャ！」

ブルースリーが俺にそう一言吠えた。何を言っているのかわからず、悪戦苦闘していると、お嬢様が近づいてきた。

「あの……兄があなたに聞きたいことがあると言っています」

どうやらお嬢様が、ブルースリーの通訳をしてくれるようだ……

っていうかわかるのかよ！

「アチャツ！ アチャチャチャチャ！ ウアチャアアア！」

「君はプリクラを撮っているとき、私のことを見ていたのか？ と、聞いています」

お嬢様がまるで外国人の通訳でもするように、スラスラと訳してくれた。

「いえ……そんなこと」

「兄さん。そんなことないですって言っていますよ」
っていつか日本語じゃん！

「アチャチャ、アチャアア？」

またブルースリーが意味不明な言葉を言った。

「フフフツ。兄さんそんなことないですよ……本当に聞くんですか？」

「アチャア！」

「はいはい、わかりました」

なんだか不思議な兄妹会議が終わったあと、お嬢様がクスクスと笑いながら通訳を始めた。

「兄が、僕のこと惚れてしまったんじゃないか？ プリクラ見てもわかるけど、どうも君は僕を見ているとしか考えられないんだ。僕がこんなブルースリーの姿をしているから気になって気になって仕方なくて、そんな僕がどんなポーズで撮るかもっと気になってしまったんではないか？ と、聞いています」

凶星！ っていうか長！ 全て俺の気持ちがばれてしまっていて、恥ずかしくなってしまうた。ブルースリーもなんだか顔を赤らめている。

俺が困った表情をしていると、ブルースリーが俺の手を握り締めた。

「アチヨウア」

さっきと明らかに異なった、甘い発音で吠えた。お嬢様もなぜか恥ずかしそうな顔をしている。

「……あの……お兄さんなんて言っています?」

お嬢様は俺とブルースリーを交互に見合わせながら、顔を赤らめて俺に言った。

「何だったら、君の彼氏になってあげようか? と言っています」

は? 何か勘違いされている。確かにブルースリーの行動が気になって、ずっと見つめてしまったが、それは、こんなキャラいるんだなあという驚きであり、興味である。好意ではない。でもブルースリーは絶対俺が好意を持っていると思っっているであろう。これは、明らかに勘違いだ。やばい、これはやばい!

「アチャ」

「さあ。と言っています」

ブルースリーが迫ってくる。恥ずかしい顔がしながら。

「アチャ」

「さあ。と言っています」

ブルースリーが俺の手を両手で握り締めてきた。

「さあ!」

「さあ。と言っています」

もう通訳がいらないほど迫ってきている。どうなってしまうんだろう! このままじゃ殺される!

「俺急用が出来たんで帰ります! 時間やばいんで!」

そう言って、俺はブルースリーの手を振り払い逃げ出していった! それを追ってブルースリーが走り出した。

俺は必死に走った。ブルースリーはすぐ近くまで近づいてきている。

もう少して捕まってしまう!

「あっ! ブルースリーだ!」

一人の男性がブルースリーに気が付いた。ブルースリーはその声に反応にし、その場でポーズを取り始めた。

しめた!

俺は急いでブルースリーから離れると、急いで下の階に降り、そ

ここにある雑貨屋に入っていった。もうここまで来れば大丈夫であろう。

確かにプリクラを撮ることは出来た。しかしこんなプリクラでは、俺の顔が見れないうえに、怪しまれるため見せるわけにはいかない。しょうがなく、今回の計画を断念することにした。

次の作戦にかけるしかない。

計画その4 助っ人登場

デパートの近くには、ケンタッキーの店があった。その店の前を通るたび、ケンタッキーのシンボルであるカーネルおじさんが、表情一つ変えずに、いつも一点を、その温かい笑顔で見つめていた。

俺が文通友達からの手紙を読み、プリクラを撮ろうと決意した次の日、新聞には『カーネルが消えた』という、何とも不思議な記事が載ることになる。俺はその記事を見て驚くことになるのは、そのときはまだ知る由もなかった。

いつもその笑顔を振りまくカーネルが、急に消えたから驚いたのではなく、そんな事実が新聞の記事になると思っていなかったからだ。

素直に白状しよう。

犯人は俺だ。

話を元に戻そう。俺はやーさん一家と別れ、ブルースリーの告白から逃れ、デパートの外をブラブラ歩いていた。そのとき、カーネルと目が合った。

次の瞬間、俺は店員の目を見計らって、カーネルを引き摺り、店の近くの細道まで連れて来た。

「お前なら、いちいち脅迫しなくてもいいから楽だね」

俺はカーネルにそう言った後、ポケットから黒いマジック（油性）で、カーネルの髭と眼鏡を塗ると、上着を黒と白のボーダー模様へと変化させた。

「これで安心だ」

俺はほっと胸を撫で下ろし、一呼吸おいたあと、またカーネルを引き摺り、デパートまで猛ダッシュで走り出した。

運良く人に見付かることなく（といっても少しは隠れたりもした

が)エレベーターまで辿り着いた。

エレベーターへ入り、ゲームセンターがある五階のボタンを押し、カーネルと一緒に上へ上がっていったのだが、扉上部にある表示が二階を示したところで急に動きが止まってしまった。どうやら、誰かが入ってくるらしい。

「やばい！」

俺は無我夢中である行動をとった。

「それでね……」

そう言いながら、二人の女性がエレベーターに乗ろうとしたが、あまりにも酷い光景に言葉を失ったようだ。俺だってそんなことをしたくない。だが、咄嗟にとった行動は、二人の女性に背に向けた状態でカーネルと向き合い、右腕をカーネルの右肩から首筋に回し、濃厚なキッスをしていたのだ。

「す……すみませんでした！」

二人の女性は、エレベーターに入ることなく、慌てた様子でそう言った。数秒後、エレベーターの扉は自動的に閉まり、また動き出した。

「危なかった」

溜息をつきながら、カーネルと離れようと思ったその瞬間、腕がカーネルの肩に引っかかり、そのままカーネルを倒してしまった。仰向けになったカーネルを起こそうと思い、しゃがんだときだった。今度は四階でエレベーターが動きを止めた。

起こしている暇がない！俺は咄嗟に行動に移った。

エレベーターの扉が開き、男性が携帯電話をいじりながら、エレベーターに足を踏み入れようとしたが、目の前の状況に驚き足を止め、顔を真っ青にしていた。「1・2・3……。何見ているんですか！この人が急に心臓発作で倒れたんです！僕が人工呼吸とかやるんで、あなたは早く救急車を呼んで下さい！」

「は……はい！」

その男性は、慌てて携帯電話で連絡を始めた。

「もしもし……はい、心臓発作で……」
そのうちに、エレベーターは静かに扉を閉めた。

やっと、五階に着いた俺は、すぐさまプリクラへと向かった。プリクラ数台には行列が出来ていたが、俺はカーネルと一緒に（引き摺り）誰も並んでいないプリクラへとやってきた。

だが、そこにはプリクラを撮る真っ最中のカップルがいた。

「次はどうやって撮る？」

男が言った。

「うーん、じゃあ私を強く抱きしめて」

女が言った。

「よし、抱きしめちゃうぞ」

馬鹿男が言った。

「あゝん変なところ触らないで」

馬鹿女が言った。

「えゝ、どこのこと？ わからないよ」

超馬鹿男が言った。

「やゝだゝ、えっち」

超馬鹿女が言った。

「かわいいなお前」

「他でやれ！」

そう言つて、俺は男の汚いくせに弾力のありそうな尻に蹴りを入れ、そこから追い出した。

「だ、誰だよ！」

男が怒鳴り声を上げながら、カーテンを開き入ってきたが、俺のナイフ（玩具）を見て驚き、後退りした。

「どうしたの？」

女が男の行動を心配したのか、カーテンをまるで暖簾のように腕で避け、顔を出した。

「えっ？」

女は目を大きく見開いて、俺のナイフを見つめた。

「俺はな、どうしてもプリクラを撮りたいんだ！ 邪魔する奴には容赦しない！」

俺が図太い声で脅すと、二人はお互いに目を合わせて息を飲んだ。

「い……いや、何でもないです……なあ？」

「う……うん。さあ、行きましょう」

二人はおどししながら、プリクラから去っていった。

まずはカーネルのセッティングだ。彼は自分の意志で動こうとしない。それもそのはずだ。俺が物心付いた頃から、店の前に立ち、店の開店から閉店までの間、ただ正面を見つめ、ガキに蹴られ、鳥に糞をかけられ、それでも自分の仕事のため、ただ店が終わるまで立ち続けているのだ。多分足が凝っていて足を動かすことさえ出来なくなっているんだ。と、命を持たぬ物を擬人化するのは、俺の妄想の代表作である。

カーネルを俺の右側に立たせたあと、自分の服装を整え、機械にお金を飲み込ませた。基本的に貧乏な生活を送っている俺にとって、この出費は痛いのだが、下らない手品グッズを買って、誰に見せるわけでもなく、人知れず自分の部屋でそれを試すよりは十分無駄ではないと思った。

画面がパツと変化し、プリクラのモードを選ぶ画面になった。「ラブラブ」「仲良し」「クール」の三種類のモードが選べるらしい。良くわからないが、モードを選ぶことによって、照明や、後でプリクラにらくがきするときのスタンプなんかが変化するらしい。俺とカーネルは「ラブラブ」にはなれないはずだ。当然そんな気はない。「仲良し」ではあるかもしれないが、俺は彼を拉致し、今日始めての共同作業だ。仲良しには程遠い。結局俺は「クール」を選んだ。

次に、カメラのアングルを変化できた。「全身バージョン」と「アップバージョン」があったが、アップにすると、カーネルの胴体が写らないので、「全身バージョン」にした。

「ワラッテ、ワラッテ」

と、プリクラが爽やかに言ったが、いらぬお世話だった。俺は凛々しい顔をペンフレンドの愛しい彼女に捧げるつもりだし、カーネルの売りは、その輝くほどの笑顔だったからだ。

俺がカーネルの肩に腕をまわし、明るい笑顔で微笑んだプリクラが映し出された。次はらくがきの時間である。

俺はセンスがあると思う。背景やスタンプの配置、名前を書くペンの色使いなど、はつきりいって上手すぎる。その技術のお陰で、俺は数倍かつこよく見える。

しかし、名前をなんて書くか正直迷った。自分はいいとして、カーネルをどう書いたらいいか悩んでしまった。カーネルだけ名前を書かないのも手だったが、それではおかしいし、両方書かないのもどちらが自分かわからない可能性もあるからだ。

俺は考えた。今のカーネルは少し怖い。例えばカーネルを父や兄弟、友達にしたら、ちょっと相手は怖がるだろう。でも、こんな人が自分の弟子的存在だと、ちょっとかつこいい気がした。

俺はカーネルに舎弟と書き、らくがきを終了した。

プリクラが出てきたその瞬間、長かったプリクラとの戦いが終わったのである。

- 終わり -

数日後、彼女から手紙が届いた。

プリクラありがとう

自分が思い描いていたより数倍かつこよかったです

しかもあんな強そうな舎弟がいるなんて……素敵ですね
そんなかつこいい貴方に会ってみたくなくなっちゃいました。
もしよろしければ……今度会ってください

俺はガッツポーズをして、家中を走り回った。歓喜に満ちた俺は、家のベランダへ出て、空に向けて大声で叫んだ。自分でも何と言っているかわからないが、気分良いときはだいたいそんな感じで、適当に叫んでしまう。今日は空が一段と綺麗に見える。まるで俺の幸福を祝ってくれるように、温かい空気が俺を包んでいる。

俺は感動が覚め止まないまま、また手紙に目をやった。さっきは気が付かなかったが、手紙の下部には、プリクラが貼つてあるじゃないか……！しかし、それが悲劇の始まりになるとは……。

ところで、先日映画に行ったときに撮ったプリクラを貼っておきます。

俺は、貼つてあったプリクラを見て首を傾げた。

あの可憐な彼女が写っていない！

俺は、間違ったプリクラを貼ったんじゃないかと思った……いや、思いたかった。

写っていたのは、蛇のような目をし、じつとこちらを鋭い眼光で見つめるスキンヘッドの男と、この前のプリクラで可憐な彼女と写っていた、あのリーゼント野朗の二人だった。

なぜこんなプリクラを張ってあるのだろうか？ 本人が写っていないプリクラなんて意味がないんだ。共通して写っているのといえ
ば、このリーゼン……。 まさか。

追伸

スキンヘッドが私のお兄ちゃん……。

もう一人が私です。

……こうして、俺の青春メロドラマは、音を立てて崩れ去って
いった。

手紙をこれでもかというくらい細かく破って捨てたのは言うまで
もない。

「どうしたものかの？」

「さあ……。わかりません」

デパートの警備員二人が、五階にあるトイレの中で不思議そうに
目の前の物体に、懐中電灯の光を照らしていた。

「帰ってもらうしかないな」

「そうですよね」

「こないたずら誰がしたんだろうか？」

二人の警備員が見つめるその先には、首から「迷子です、家に帰
して下さい」というダンボール製の看板を首にかけ、不敵な笑みを
浮かべ、まるでトイレに訪れる客を歓迎しているように立ち尽くす、
カーネルだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3226r/>

プリクラのススメ

2011年5月27日19時10分発行